

保育計画成果報告書

法人名	社会福祉法人 新樹会
施設名	幼保連携型認定こども園 緑が丘こども園
報告者（役職）	池邊 優雅 （副園長）
住所・連絡先	大分県大分市緑が丘 5 丁目 23 番 1 号
	T E L : 097-542-3477
	F A X : 097-542-5353

○タイトル（保育計画）

知恵と想像をFULL活用！みんなで「童具」に挑む！

○主な助成備品

WAKUブロック

1. 保育計画策定の目的

「遊びが学び」

本園は、2015 年 4 月より幼保連携型認定こども園になりました。認定こども園という就学前の幼児教育として早期教育を期待する保護者の方も多かったことでしょう。

しかし、園生活を送るこの時期の乳幼児は、細胞分裂同様、最も吸収力があり、みるみる成長できるときです。本園では机上での知識を伝える以前の「学びたいと思う心」「熱意」「好奇心」など一見目には見えない力こそ重要と捉え、その力を子どもたちが育むことを目指し、五感を大いに使った「遊び」の中での「経験」を重視した園生活を送っています。

今回の助成備品WAKUブロックを生み出した和久洋三氏は、デザインされたおもちゃを「童具」と呼びます。そして、「遊びの中で、子どもたちはたくさんのことを学び、遊と学を区別することはできません。童謡・童話・童具どれも、子どもの精神を育む大切な文化財です。」と、述べられています。そのような思いから作られたWAKUブロックは、対象年齢が 0 歳から 100 歳までとされ、幼老共生の本園にとって、様々な活動の可能性を感じました。また、近年の積み木のように角が丸く加工されていない、角のあるWAKUブロックは、危険な岩の小川や急な傾斜面の山がある本園の園庭の方針と同様、危険を包み隠さない上で遊ぶこと、危険を自分自身で認知し他者とも用心を覚えながら関わり遊ぶことなどと、ニーズが重なりました。木そのものの色合いと、単純な形を思いきりたくさん使って、作りたいものをまずは色合いから想像しながら創り出す力、共につくる難しさ、創る中で必要なルール、異年齢交流、世代間交流など、WAKUブロックを通して育んでほしいという目的がありました。

2. 具体的な実施内容

午前中の「ラウンタイム」「ステップタイム」での積み木遊びはもちろんですが、本園では13時から15時までの通常は子どもたちの午睡の時間に、4歳児、5歳児の年中、年長クラスの子どもたちで、体力のある子どもに限り「マインタイム」という労働・奉仕・趣味・休養という自己選択・自己決定の時間があります。自分のこだわりたい力を極める「自分自身の時間」です。この時間にWAKUブロックも1選択肢として加わりました。

WAKUブロックで遊ぶ際のルール

本園では、WAKUブロックの3つの使用ルールに対し、以下の意味づけをし、取り組みました。

- ① 投げない～モノを大切に使って取り組もう！
- ② 叩かない～協働してみんなで有意義な時間をつくろう！
- ③ 壊さない～大事に創り上げたものを大切に思い、最後まで誇りを持とう！

3. その成果と評価

年齢ごとに、積み木遊びの工夫があります。

積み木遊びでは、どの年齢の子どももまずは一人でじっくり遊びます。そして、その満足感を味わうことで、次は友だちの作っているものにも興味を持ちます。

0,1,2歳児は、積み木1個でも、電話、車などに見立て遊びをし、高くなったり、長くなったりすることを楽しみながら、もちろん壊れてしまったりすることも含めて楽しみながら繰り返し個々の遊びを続けます。

友だちや保育教諭の発した一言やアイデアからイメージがより広がっていく様子が見られるのは3歳以上の子どもたちの積み木遊びです。イメージを共有しながら共働作業も始まります。ダイナミックな作品にも発展し、そうすると皆でその中に入りたいという思いも生まれ、さらに工夫が加えられていきます。作る楽しさだけでなく、積み木の中での“ごっこ遊び”も楽しそうです。

そして、WAKUブロックの最後のお楽しみが〈お片付けのお楽しみ〉です。大きさが2倍体、3倍体と規則正しいので、ブロックの種類ごとにまるでパズルのようにブロックケースに収まっていきます。きちんと収まった時の完成感と言うまでもありません。

子どもたちの思いのままに計算されて作られたWAKUブロックだからこそ、展開・発展する積み木遊びです。

遊びの移ろい 1)

同じ形のブロックをひたすらに積み上げる。

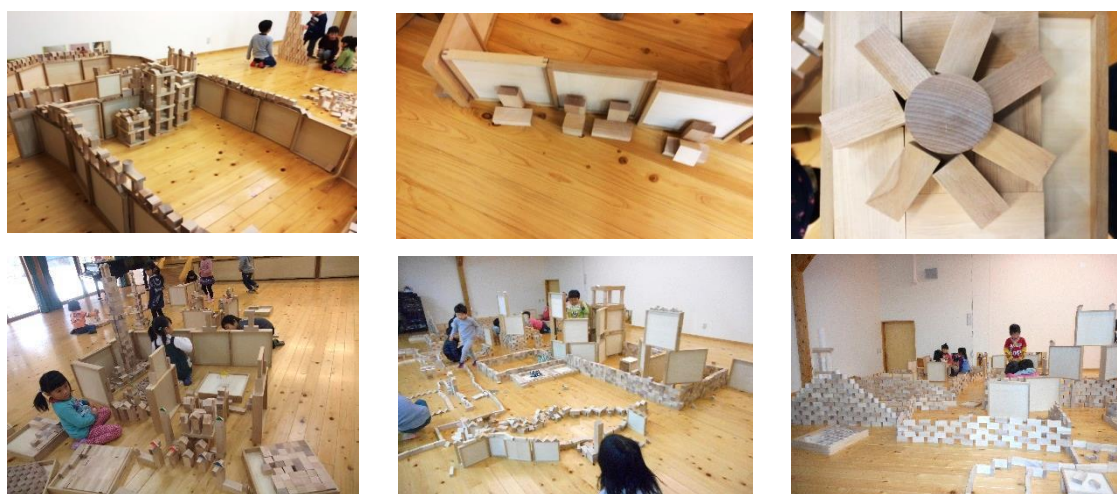
コツコツと高見を目指すお友だちと、「壊さない」のルールに則って積み上げながらも

何気なく倒れるスリルを味わいたいお友だちに分かれてしまう。これまでの空き缶積みゲームの延長からか、小さなクラスのお友だちは積み上げ競争ゲームを始める。



遊びの移ろい 2)

いろんな形のブロックや、ブロックケースを使って、基地づくり。
ブロックケースにさらにブロックで補強を加え、住空間を強化。三角の頂点の面を使うなど、危ないバランスを保って神秘的な空間を演出した一角もある。お風呂場や寝室、キッチンも完備され、ごっこ遊びの舞台にもなる。



遊びの移ろい 3)

基地に高さができる。
みんながトップに君臨する者として、ちょうど収まる城を創りあげ、入れ替わり立ち代わり、そのスペースに収まる。



遊びの移ろい 4)

積み木でありながら平面にこだわる。

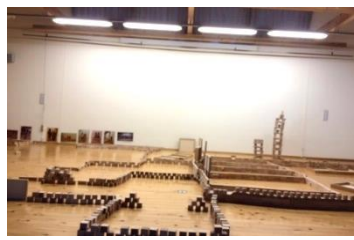
積み重ねの遊びから同じ形のブロックを平らに敷き詰め、その上の上のつてみたり寝転がったり積み木の質感、感触を体感。



遊びの移ろい 5)

巨人の視線（上から）で空間遊びを楽しむ。

平らに敷き詰められたブロックの上に小さな都市計画が広がり始める。単体の空間から夢の都市という、大舞台に移ろう。



～子どもから高齢者まで、共に楽しめ、取り組める～

人類が進化し、文化を作り上げていくことができた一番の要因は「高齢者」の存在だったといわれます。人間以外の他の動物には「高齢者」の存在がなかったため、文化を作り上げることができなかったそうです。これは、何を意味しているのでしょうか。長く生きた高齢者の年の功の尊さは、私たちが発展していく上で欠かせないものだからです。

本施設は、日々生活しながら様々な困難に直面し、共に歩み寄ることによって生まれる文化を大切にしていきたいと思っています。WAKUブロックは、そうした観点からも共

に楽しめる重要なツールの一つなのです。手を上手く使えなくなっているおじいちゃんとも遊びます。ある程度の高さのブロックになったとき、立ち上がり積み上げることが困難になっているおばあちゃんが思わず立ち上がろうとします。そんな時こそ、子どもたちがおじいちゃん、おばあちゃんの意見を聞きながら積み上げていく光景があります。元々建築をされていたおじいちゃんのさすがに安定した積み上げ方に、子どもたちも闘志を燃やします。お互いが刺激となっています。



5. 今後の課題と展望

本園は、木造建築で、ホールも保育室も天井は木の梁等もあえて子どもたちに日常見えるかたちで建築しています。

構造が子どもたちの目の端に映ることで、何かの好奇心の入口になる可能性（積み木遊びの参考・将来の大工さんや設計建築士などの職業選択）になってもらいたいからです。

WAKUブロックも本園のそうした建物の意図や方針の延長として活用させていただきました。創れば創るほどブロックがもっとほしいもっとほしいという子どもたちからの声がありました。数が多ければ多いほど、足りない箇所が補え、より大きな作品に発展していくことと思います。しかし、「足りない」ということは、その中でいかに、創り上げていくかという「工夫する力」を伸ばせる貴重なチャンスです。今後の課題としまして、WAKUブロックの持つ有効な特色を味わった上での、「足りない」ところから「今、園にあるもの」を併せ持つて何ができるか、そのようなスタンスでの遊びの構築にステップアップしていきたいと思っています。

以上

